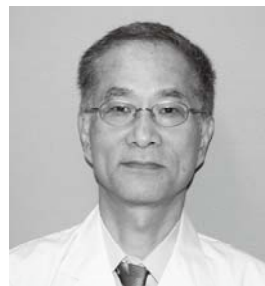


緩和ケア科



診療部長
(緩和ケア外科)
土屋 宣之

専門医資格等
緩和ケア



診療科長
(緩和ケア内科)
久保 速三

専門医資格等
日本緩和医療学会暫定
指導医
専門分野
緩和ケア

□ スタッフ

平成27年10月1日時点

	氏名	専門医資格等	専門分野	得意疾患
医師	石田 大助	婦人科学会専門医	緩和ケア	

□ 診療科の特徴

施設認定等 日本緩和医療学会

□ 主な対象疾患

癌一般

□ 診療(業務)内容

1. 与えられた構造の中で環境整備—視覚(照明、花木)、聴覚(院内放送の個室内制限)など—
2. 利用者の価値観や生き方を尊重するためにことさら根気と丁寧さを要するケア、自立性を奪われていく困難と苦痛の中で行われるケア
3. 上記のような場を提供・俯瞰、特殊な感情労働に従事するケアスタッフへの目配り
4. 場の提供に続いてそこで有意義な時間空間を作る力を持った利用者や家族の選択のために入棟の適応の可否を判定員会で議論検討する。
5. 目的としてでなく手段としての症状緩和、薬剤による対処療法の役割は限定的である。たとえ症状緩和に成功しなくとも生きる場所を提供できる可能性もある。自宅に遠く及ばなくとも、多職種による行事企画や音楽療法、食事への気配り、家人への配慮を通してかけがえない時間を過ごす場を作りうる。あくまで我々は触媒ではないのだが。
6. 在宅への橋渡し、レスパイト入院への門戸開放
7. 遺族への配慮:訪問遺族の傾聴に時間をかける他に遺族会、遺族への書状を通して継続的な関わりを試みる
8. 緩和ケアチームを中心とした、一般病棟、地域医療への貢献

□ 診療実績(平成27年度)

緩和ケア内科入院患者数

1日平均患者数	新入院患者数	平均在院日数
9名	23名	54日

緩和ケア内科外来患者数

1日平均患者数
0名

緩和ケア外科入院患者数

1日平均患者数	新入院患者数	平均在院日数
12名	65名	52日

緩和ケア外科外来患者数

1日平均患者数
4名

□ 地域医療連携・広報活動

2015年(平成27年)緩和ケア研修会関係

2015/1/24-25

宇治第2岡本総合病院、企画担当者およびファシリテーター

2015/1/31-2/1

公立南丹病院 ファシリテーター

2015/2/7-8

京都市立病院 ファシリテーター及び演者(『オピオイドを始めるとき』)

2015/2/15

三重フォローアップ研修会 ファシリテーター及び演者(『死が近づいたとき』)

2015/2/21

静岡フォローアップ研修会 ファシリテーター及び演者(『アドバンス・ケア・プランニング』)

2015/3/21-22

愛知医科大学 ファシリテーター及び演者(『オピオイドを始めるとき』)

2015/5/23-24

名古屋医療センター ファシリテーター及び演者(『疼痛事例検討腎癌』)

2015/7/4-5

独立行政法人国立病院機構 京都医療センター

フォローアップ研修会 企画担当者

2015/7/11-12

市立奈良病院 ファシリテーター及び演者(『オピオイドを始めるとき』)

2015/8/1-2

静岡市立静岡病院 ファシリテーター及び演者(『呼吸困難』)

2015/9/26-27

大阪鉄道病院 ファシリテーター及び演者(新指針『M1a緩和ケア概論』)

2015/10/31-11/1

独立行政法人国立病院機構 京都医療センター 企画担当者

2015/11/7

愛知県緩和ケアフォローアップ研修会 ファシリテーター及び演者(M-15死が近づいたとき)

2015/11/14-15

公立南丹病院 ファシリテーター及び演者(新指針『M2b つらさの包括的評価と症状緩和』)

学術活動報告(学会・研究発表など)

区 分	演 者 ・ 演 題 ・ 学 会 名
国内学会	久保速三、土屋宣之 超高齢社会における終末期医療を考える—QOLの改善?— 第29回医学会総会 2015.4.12 京都
国内学会	久保速三、山尾なつみ 理学療法士と医師の対話を通してend of life care におけるQOL維持を考える—レスポンス・シフトを参照枠として— 第20回日本緩和医療学会 2015.6.21 横浜
国内学会	久保速三、上村直子 自分らしい逝き方のために緩和ケア外来をアドバンス・ケア・プランニング(ACP)の場として活用する 第39回死の臨床研究会 2015.10.12 岐阜
国内学会	土屋宣之 在宅癌チーム医療を支える、在宅医・訪問看護師・調剤薬剤師・基幹病院の発展と問題点 第53回日本癌治療学会 2015.10.31 京都

投稿論文など

著 者 ・ タ イ ト ル ・ 著 書 ・ 雑 誌 名
久保速三 がんのリハビリテーション—緩和ケア病棟医師の立場から— 理学療法京都 2015;44(44):19-22